

韋

いへん

編

愛知大学図書館報

No. 27

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、なめし皮でぐるぐるまいてまとめた上古の書物。

## 図書館にいて読書しよう

名古屋図書館長 黒野 恭成

一 先ごろ、「さあ、図書館へ行きましょう」という一文を書いた（愛知大学通信155号、2003年4月1日）。ある問題について学生自身が自分の足で調べ、疑問をみつけ、どうすればよいかを考える経験をし、その能力を養うためには、図書館へ行って情報・文献を検索し収集する必要がある。大学には立派な図書館があるのだから、学生諸君も大いに図書館を利用してその能力を養ってほしいという趣旨のものである。ただ、舌足らずのところがあったので、その不十分を補うこととしたい。

二 「百円の手形って、ホント」といった調子の新聞報道で、当時の世間の関心を呼んだ昭和61年7月10日の最高裁判決は、その民事判例集40巻5号925頁に載っている。まずはじめに、この事件の事実を確認しておく。電気工事業のY会社は下請け工事業のAに工事代金の手付けとして百万円を支払うために、約束手形をAに振り出した。不動産業のX会社はAの手形割引の依頼に応じてこの手形を（100万円の手形と思って）割引いて取得した。ところが、この手形の金額欄に「壺百円」と、その右上段に「¥1,000,000—」の二通りの記載があり、また100円の収入印紙が貼付き



れていた。所持人のX会社は100万円の手形として振出人のY会社に支払請求したが、これを拒絶されたので提訴したのが本件である。

次に、判決の理由である。手形法6条1項（77条2項）は、金額が文字と数字で重複記載されており、そこに差異があるときは、文字で記載された方を手形金額とすると規定する。最高裁判決はこの規定を適用して、本件手形の手形金額は文字で記載された「百円」としてとした。これに対し、判決には反対意見がついている。それは一方の記載が他方の記載の誤記であることが手形上明らかな場合には、この規定を適用すべきではないとして、手形金額は誤記ではない方の「1,000,000円」としてとした。すなわち、判決は誤記かどうかを考慮すべきではなく、文字優先規定の6条1項を一律に適用すべきであると判断した。これに対して、反対意見は明らかな誤記であるかどうかによって規定の適用を振り分ける判断をしたのである。そこには、一規定の適用の当否、したがって一規定の解釈をめぐってはあがあるが、X会社とY会社の利害の衝突に関する厳しい法的価値判断の対立がある。

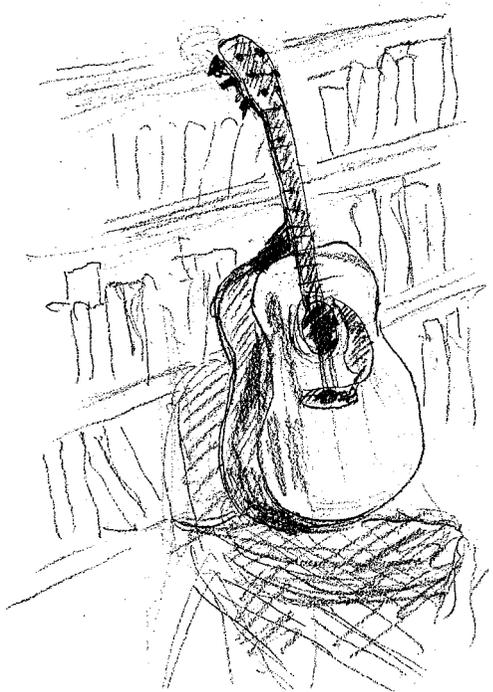
三 X会社とY会社の利害の衝突に関して見落としてはならないことがある。それは、裁判の争点になっていないから判決には出てこないが、Aに対する各当事者の法律関係がどのようになるかということである。裁判では手形金額のいくらかをめぐるX会社とY会社の争いになっているが、手形の外においては100万円相当の割引金を手に入れて実際に得をしているのはAではないか、という状況があるのである。

(1) もしX会社が手形によりY会社から百円の支払しか得られないとすると、X会社はAをつかまえて割引金の返還請求、または手形の買い戻し請求をして割引金を回収することができる。ただ、事実上Aに資力がないときは、X会社に不利益が生ずる。だからこそ、X会社としてはこの手形によってY会社から100万円の支払を得ようとするのである。(2) 反対に、もしY会社が手形によりX会社に100万円の支払をしなければならないとすると、Y会社はAをつかまえて下請け工事をするよう請求することができる。Aが工事に着手しないときは、契約不履行にもとづく損害賠償を請求することができる。ただ、実際にAに資力がないときは、Y会社に不利益が生ずる。だからこそ、Y会社としては手形による100万円を支払いたくないのである。手形金額がいくらかの手形法上の問題であるが、手形の外にあるこのような関係も踏まえて妥当な結論を出さなければならない。根は浅いようで深い。

四 当事者の利害の対立をどのように調整し、どのように利益の均衡をはかればよいか、その法的価値判断は容易ではない。たかが手形金の支払という財産上の利害の対立の問題にすぎないが、されどこれに相当な価値判断を下すには人間社会の法と文化に対する深い認識が欠かせないと思う。さらに、その価値判断は人格性に根ざした説得力のあ

るものでなければならないと思う。

最近、齋藤孝著『読書力』（岩波新書、2002年）を読んだ。昨今の日本の若者の、本は別に読まなくてもいいという本離れの傾向は深刻である。読書は自己形成にとって強力な道であり、自己を広めるコミュニケーション力の基礎であることを説く、いわば「読書のすすめ」の啓蒙書である。同感である。図書館には情報・文献・資料があるだけではない。様々なジャンルの図書・本がたくさんある。情報の検索・収集のために図書館に行ったら、横道にそれて別の図書をみて読んでほしい。多くの学生が図書館に行って、ぜひ読書を習慣づけるきっかけを作ってほしいと思う。



## シリーズ研究所紹介 その③

国際問題研究所長 三好正弘



本シリーズの①経営総合科学研究所、②総合郷土研究所の紹介において、各所長がその「研究」の性格を強調されていたのは、わが意を得たりで、心強い思いです。

社会に対する大学の貢献は高度の教育と研究にあります。国際問題研究所（以下、「国研」と省略）は研究に重点を置く機関として、大学創立の翌々年の1948年に開設されました。政府系の日本国際問題研究所や他大学の類似の研究機関が40年程度の歴史を有するの比べると、愛大の国研は創立から55年になり、先輩格です。

大学自体が戦後もなくの厳しい経済社会状況の下で意気高らかに誕生したのと同じように、国研も乏しい物質的条件の下ながら、遠く世界全体を見渡す視点から研究活動を開始しました。その活動の成果の一部を当初『国際政経事情』というガリ版刷りの冊子として刊行したことが、記録に残っています。

大学が戦前上海にあった東亜同文書院大学のスタッフを中心として作られたいきさつからも、国研は当初から中国研究に力を入れ、国内外にその成果が知られています。蔵書も中国関係書が多く、他所にない文献資料を求めて内外の研究者が利用に訪れています。

昨年度大学に「国際中国学研究センター」(ICCS)の設置が文部科学省によって認可され、世界の中国学研究の中心的役割を果たすことが期待されており、その調査研究のための「図書館」として、国研は一層重要性を増すことになるでしょう。このことを十分認識して、今後さらに研究所としての機能を充実させるよう心がけます。

他方で、研究対象地域の拡大が必要であると考えられ、アジア、とくに北東アジアと東

南アジアの研究に力を入れたいと思います。

北東アジアについては、昨年秋に「21世紀における兩岸関係と日本」と題する国際シンポジウムを開催し、従来むずかしいとされていた著名な中国研究者と台湾研究者に一堂に集まって頂き、有意義な意見交換を実現しました。このフォローアップとして、向こう2年にわたり、朝鮮半島を加えた北東アジアの国際関係を分析する作業を行います。

東南アジアに関しては、これまで大きな研究成果を上げている訳ではありませんが、日本の将来にとって重要な地域ですから、その地理、歴史、政治、経済、法律、文化などの諸局面について順次調査研究を行いたいと考えています。

国研は、内外の文献を収集・所蔵して研究者の利用に供するという面ではすでに十分な役割を果たしてきましたが、これに加えて、今後は積極的な研究成果の発表という、“発信”作用を従来以上に重視して参ります。

学生の皆さんには、国研がこのような理念で動いていることを知って頂き、定期的に開催している研究会、講演会などに積極的に参加されることを期待します。若い斬新な発想は、専門研究者にとってもよい刺激になりますので、歓迎します。

愛大の設立趣意書には、「世界文化と平和に寄与すべき新日本の建設に適する人材は国際的教養と視野を持つこと」が最も必要な資格の一つであると謳われており、このような人材の育成が建学の精神とされました。学生の皆さんには、ぜひその高らかな理想と精神を国研の活動から嗅ぎ取って頂き、プライドを持って国際関係の研究に励んで頂きたいと思ひます。問題意識の高い学生さんには、国研は協力を惜しみません。水準の高い研究を我々と一緒にやっていきましょう。

# Japanology について

国際コミュニケーション学部助教授 鈴木 秀 治



まず最初に、Japanology (日本学)と名づけられた貴重なコレクションが豊橋図書館にはあったことを喜びたい。これは副題を A Collection of Western Books on Japan といって

19世紀から20世紀にかけて、欧米において日本および日本人について書かれた書籍を集めたものである。内容は日本の歴史、社会、風俗・慣習、旅行記・滞在記、文学、辞典・事典類など、多岐にわたる文献(115点)を収集している。使われている言語は大半が英語であり、その他にはフランス語、ドイツ語、ポルトガル語、オランダ語がある。

まだ到着したばかりで内容を詳しく調査していない段階なので、不十分であることを承知のうえで、このコレクションからいくつか紹介してみよう。

最初は旅行記・滞在記からいくつか例をあげてみよう。江戸時代に限ってみると一番古いのはGolownin: *Voyage de M. Golownin, Capitaine de Vaisseau de la Marine Impériale de Russie, contenant le récit de sa captivité chez les Japonais pendant les années 1811, 1812 et 1813, et ses observations sur l'empire du Japon.* (1818) である。

これはロシアの海軍士官ゴロウニンの『日本俘虜実記』(原文はロシア語)のフランス語訳である。ゴロウニンはディアナ号の艦長として南千島列島測量中に日本の捕虜になり(1811年)、函館および松前に2年あまり抑留された。本書は捕虜から釈放されるまでを記録したものである。またこれには、ゴロウニンの釈放に力を尽した副艦長リコルド(Ricord)の手記が添えられている。

その他に注目すべきは、L. Olifant: *Narrative of the Earl of Elgin's Mission to China and*

*Japan in the years 1857, '58, '59* (1859) および S. Osborn: *A Cruise of Japanese Waters* (1859) である。前者は日英修好通商条約のために来日したエルギン卿の秘書オリファントが書き残した記録である。後者はエルギン卿に同行したフェリアス号艦長オズボーンが書き記した記録である。両者をあわせて読めば興味が増すであろう。

さらにあげるべきは、Pompe van Meedervoort: *Vijf Jaren in Japan (1857-1863)* (1867-68) である。日本ではポンペという通称で知られたオランダの海軍軍医による日本滞在記『日本における5年間』(原文オランダ語)である。1857年、海軍伝習所医官として来日し、長崎の養生院などで、西洋医学を日本人に教えたことで名高い。

明治以降では、H.G. Ponting: *In Lotus-Land Japan* (1910) あげておこう。ポンティングはイギリスの写真家で、1902年頃から何度か来日、日本各地を旅行した。本書『この世の楽園・日本』には著者撮影の100枚以上の写真がおさめられていて、文章とともに明治時代の日本を記録する資料となっている。

歴史関係では、La Mazelière: *Japan. History and Civilization* (1938-39) をあげるべきだろう。全8巻の大著『日本：歴史と文化』をフランス語原典から英訳したものである。古代から日清戦争までを扱っていて、記述は江戸時代以後がとくに詳しい。H. H. Gowen: *An Outline history of Japan* (1935) は古代から昭和初期までを扱っている。

歴史上の人物の評伝としては、宮本武蔵をとりあげた W. Dening: *Japan in Days of Yore. The Life of Miyamoto Musashi* (1888)、徳川家康を扱った A. L. Sadler: *The Maker of Modern Japan. The Life of Tokugawa Ieyasu* (1937) などがあげられる。

風俗や習慣に関するものでは、De Becker:

*The Nightless City, or the «History of The Yoshiwara Yukwaku»* (1899) がある。ディ・ベッカーはイギリス人で、1884年頃に21歳で来日している。日本に長く住んで、通訳および法律顧問業を営んだ。『眠らない街—吉原遊郭の歴史』と題名にもあるように、歴史をたどりつつ吉原遊郭を社会学的に研究したものである。本文だけでなく挿絵も興味深い。

社会の分野では、W.E.Griffis: *The MIKADO: Institution and Person* (1915) をあげておこう。グリフィスはアメリカの教育者で、明治のはじめに来日し、福井藩に雇われ、まもなく中央政府に迎えられた。本書『ミカド 制度と人』は、「ミカド」の研究であり、外国人が初めて書いた明治天皇伝である。

文学ではラフカディオ・ハーンの著書が12点、ハーン関係の研究書が1点おさめられている。ハーンは比較文学研究の宝庫であり、これからも研究が進展すると思われる。このコレクションは初版本が多く含まれているのが特徴である。*Stray Leaves from Strange Literature* (1884), *Gleanings in Buddha-Fields* (1897), *A Japanese Miscellany* (1901), *Kotto. Being Japanese Curios* (1903), *Fantastics and Other Fancies* (1914), *Pre-Raphaelite and Other Poets* (1922) などである。

稀覯本（もちろん初版）として、*Gombo Zhebes* (1885) をあげておく。これはクレオール語で書かれたことわざを収集した小辞典である。クレオールの6方言からことわざを選び、フランス語と英語に翻訳し、さらに脚注を加えたものである。題名の『ゴンボ・ゼーブ』とは、スープの中に魚、貝、野菜な

どその土地で採れるものを入れたごった煮料理のことである。クレオールに新しい光が投げかけられている現代にあって、ハーンの試みはもっと注目を集めていい。

日本文学の翻訳としては、F. V. Dickins: *Chiushingura or the Loyal League* (1880) がある。ディキンズはイギリスの医師・弁護士・日本学者で、『百人一首』や『竹取物語』など、日本の古典文学を最初に翻訳したことで知られる。本書は竹田出雲の『仮名手本忠臣蔵』を英訳したものである。

事典類としては、各項目をアルファベット順に並べたコンパクトな日本文化事典ともいえるべきB. H. Chamberlain: *Things Japanese 5th ed.* (1905) をあげておこう。イギリスの日本学者チェンバレンの代表作『日本事物誌』は、現代でも読者をもつ日本学の古典である。これは第6版までであるうちの第5版である。

さらに日本に関する百科事典としては、F. Challaye: *Le Japon Illustré* (1915) があげられる。これは現代だったら『ヴィジュアル版日本百科小事典』とでも呼んでいいほどたくさんの写真図版（600枚強）と地図をおさめた百科事典である。

最後に、美しい図版の入った豪華本を二つとりあげておこう。G. A. Audsley & J. L. Bowes: *Keramic Art of Japan 2vols.* (1875) は日本の陶磁器の研究書である。第2巻は日本各地の陶磁器を細密なカラー挿画で解説紹介している。もう一つはF. Régamey: *OKOMA* (1883) である。著者のレガメはフランスの画家で、1876年と1899年に二度来日し、日本各地で数多くのデッサンを残している。本書『お駒』は滝沢馬琴の原文に、カラーも含む美しいイラストを加えたものである。

紙幅が尽きてしまったが、最後にひとこと付け加えておく。すでに豊橋図書館に備えられているCollection of Japan & Japanese cultureとあわせれば、日本関係の充実したコレクションになる。多くの人の利用を願っている。



# My 図書館

国際コミュニケーション学部教授 トーマス・グロース



私が大好きなテリー・ブラチエットが書いた「ディスクワールド・シリーズ」では、アंक・モアポアクという町が中心になっている。その町には、大学があり、その名前は「見えない大学」である。なぜなら、「見えない大学」では、主に魔術が教えられているからです。教員はすべて魔術師で、寝食の他は様々な変わった研究を行っている。無論、「見えない大学」には、図書館もあるが、かなり危ないところである。図書館のドアには大きな看板が張られ、「危険！ 入るべからず！」とある。魔術の本は互いに読みあい、時には、学生は本を読むだけでなく、本に読まれるときもある。だから、大変危険だそうである。司書は1人しかいない。実は、「1人」と言えなく、オランウータンなので、「一匹」と言えばいいであろう。魔術の大学には、ときに事故もあるので、司書は以前人間であったが、魔術の事故に巻き込まれ、オランウータンに変わった。本人にとっては、恵まれている状態になったようで、ことばができなくなっているの、学生と会話をする必要もなくなっている。「見えない大学図書館」のもっとも怖いのは、「図書空間」という不思議な現象である。図書空間にはすべての可能な本が存在し、未だ書いていない本でさえ存在している。そのため、図書空間は実際の図書館より広くて、十分な知識のない者は道を迷い、尾羽うち枯らす。

細かくまで比べなくてもいいが、愛知大学図書館は「見えない大学図書館」と随分違っていると言える。司書は、無口のオランウータンでないどころか、やさしい人たちである。どんな変わった質問にでも寛容に答えてくれる。変身されることを怖がることはない。一方、図書空間というのは愛知大学図書館にもあることを否定できない。実は私は図書空間に入る羽目になった。図書空間に入ったという感じの1つは、本棚のマークが読めなくなることである。三步前には分かっていたのに、少し進んでいくと突然、マークが違って、前

に戻ってもマークが無い時がよくあるのである。

多分、図書館の奥に入るのは司書の訓練が必要なのだと思われる。学生たちが図書館を司書と同様に利用することは期待してはいないが、実際には、特に学生に利用してもらいたいと思っている。

図書館というところの特徴は広さである。その原因は、本が十分になれば、大した図書館に成らないことである。残念ながら、本の数がまだ増えるという見込みがある。どの学問の分野でも、研究が活発で、速やかに進んでいく。その研究結果は本として出版され、いつか図書館に入る。実は、毎年図書館に必要な本の数は爆発的に増えている。ある分野では、本に出版されたら、内容はもう遅れていることもある。特に自然科学はそうである。大学生にとって、その図書館の本の山からどうやって勉強の役に立つ本を選ぶのか？

本の探し方などについては、大学生向けの説明会が設けられているが、それは検索技術の案内に過ぎない。そういう案内は必要で、分かりやすく行ってきてあげたいが、内容的な案内も必要であると思う。

図書館の図書はすべて同じく重要ではない。ある本は専門家のみが使用し、また、ある本は1年生のみが使用する。でも、どれぐらい使用されているのか？ 例えば、どの本が一番よく借りられているのかの情報は全然ない。経済学や社会学などのどうしても必要な図書は何であろう？ 大学生がどの分野のどの本を一番評価しているのかも不明である。

ですから、そのリストを作ってもらい、それをアクセスしやすいところに公開してもらいたい。内容についての案内なので、教員の協力は必要である。第一歩として、アンケートを教員に配布し、それに自分の分野にとっての一番重要な本5冊を推薦してもらおう。さらに、最近の研究結果はインターネットにもよく公開されるので、できれば重要なホームページのURLも教えてもらいたい。そうすると、広い図書館は少し透明になり、大学生に使いやすくなるであろう。

## 書物とのスキンシップ

短期大学部講師 須川 妙子



学部、院浪、院生時代と足掛け7年もの間、さる女子大学に在籍し、「花の女子大生」を謳歌した。近隣には超有名国立大学、お坊ちやまぞろいの有名私立大学が多数あり、時代はバブル期の絶頂期……

このシュチュエーションから想像されるのは、絵に描いたような艶やかな女子学生ライフ……。たぶん、華やかなこともいっぱいあったのだろう。しかし、卒業して十数年経ったいま、学生時代はどうだった？ と問われれば、図書館書庫のひんやりとした空気と、ちょっとかび臭い匂い……という、かなり地味な印象が懐かしい感覚として真っ先に思い出される。

院生になったとき、研究室の先輩からある言葉が贈られた。

「書物とのスキンシップを忘れずに」

書物は必ず手に取りなさい。撫でてあげなさい。じっくり読まなくてもいいから、とにかくページをめくりなさい、ということだった。

以下はその先輩の長い講釈の要点である。院生時代は人生の中で最も学問している、そして最も食欲に吸収する力をもてる時期だ、そのためたくさんの書物に触れる必要がある。ただ、全て真面目に読み込もうとすると息切れしてしまう、時間も足りない、だから出来るだけたくさんの書物に触れて書物の重さや紙の手触り、バラバラめくった時に目に付いた言葉、ふと感じられた著者の思いなどを「感覚」として印象付けておきなさい。そうすれば、その書物の内容が本当に必要になったとき、「ああ、そういえば、あの辺りに、あんな本があったなあ。」と思い出す、一度撫でておくと『その書物が呼んでくれる。』ということだった。

その先輩の不思議な言葉を鵜呑みにしたわけではなかったが、図書館の本に触りまくった。単にめぼしい書物が見つけられずに、闇雲に手にとっていたのかもしれないが、かび臭くて、ひんやりとした、うす暗い書庫に入り込んで、「貴重書」といわれるたいそう古めかしいぼろぼろの古文書にもこっそり触った。ちょっと角が欠けたけど黙っておいた。

修士1年が終わろうとしている頃、どうしても確証が見出せない課題にぶつかっていた。当時、あの不思議な言葉を残してイギリスへ留学していた先輩にお手紙を書いた。お返事がすぐに来た。「第2書庫の奥の方に、表紙が朱色でザラツとした布張りの、ぺらぺらだけど価値の高そうな本があるよ。題名知らないけど、たしかそれに関係することが載ってたような気がする」と。載っていました。おかげで修士論文への突破口が開けました。

ああ、この感覚なのかと実感できた。必死になって1冊の本を読んでいるだけでは、視野が広がらない。チラッと捲っておくだけ、撫でておくだけで書物の印象が「感覚」として体に残る。心を落ち着けて感覚を研ぎ澄ませると、その時に必要な書物の印象がよみがえってくるのだと。目を三角にして文献を探し出そうとしていた姿勢を改め、図書館の中をぶらぶらしながら書物に触れて、以前にその書物で得た感覚を呼び起こすようになった。面白いほどに、必要な書物が探し出せるようになった。全て一度撫でてあげた書物ばかりだった。書物を手に取り開く瞬間の、ちょっとかび臭い匂いを感じると、懐かしい人に逢えたような感覚になっていった。そして、先輩と同じ言葉を、後輩に伝えている先輩面した私がいた。

今でも図書館書庫にはぶらぶら出かけていく。専門外の分野でもなんとなく触ってくる。インターネットで情報を簡単に手に入れられる時代に、のろまなことをやっているかもしれないが、「書物とスキンシップ」することの喜びは、パソコンを通しての楽しみとは一味違うもの。学生諸君にもぜひこの喜びを若いうちに実感して欲しいと願っています。そして、学生時代を思いかえす時に、華やかだったことよりも、心の奥底に根付いている「感覚」がじんわりと湧き上がってくるような、そんな学生生活を過ごしてください。



# 教員、学生、それぞれにとっての大学図書館

法学部助教授 松戸 浩



凡そ（特に文科系の）研究者にとって図書が重要な研究基盤であることは今更いうまでもないが、実際にはその充実度に就いては大学間でかなりのばらつきがある。蔵書の豊かさは、その大学がど

の程度研究というものに重きを置いているかを外からみる際の一つの指標となりうるものである。

先人は研究に於ける図書の重要性を或る意味では今以上に認識していたといえる。第一次大戦で日本がドイツに勝ったとき、日本は賠償の一部を態々図書による支払に代えた。それは当時あった東京、京都、東北等の各大学に分配されたが、今日では孰れも貴重なコレクションとなって研究者の用に供されている（図書の「略奪」といった観点はここでは擱く）。

こうした例は、本学にもあった。私が本学に赴任したのは2年前だが、最初に図書館内をうろろうした際、私の専門（ドイツ公法学）にとっては不可欠の雑誌が幾つか創刊号からフルセットで揃えられているのに気付いた。それは19世紀後半に創刊されたもので、戦後創設された大学では大抵最初は欠けているものである。それを手に取ってみると、その購入年次は1950年代であった（おそらく大学院の設置に備えたものであろう）。後で知ったことだが、当時の本学は財政的に非常に困窮していて、公務員並の給与の支給が大きな争点であったという。その困難な時期に金銭面・機会の両方で入手の極めて困難な図書を購入していたことに感銘を受けると共に、当時のスタッフの先見に思いを馳せた。

このように大学図書館の充実は費用面に劣らずそれに関わる人々の意欲にも大きく依存するものであるが、如何にそれが充実していたとしても、そのみで用を足すことは出来ない。私が研究生活を始めた頃は未だインターネットなど普及していなかった頃で、当然Web-Catも無かった。そこで他大学に図書の貸借等を頼むときは、国立国会図書館の「新取洋書総合目録」を繰って自分で所在先を特定した上で

レファレンスに請求しなければならなかった。同書は図書の刊行年ではなく各図書館の収蔵年を基準としているので、この作業はかなり厄介であった。現在ではパソコンで簡単に検索が出来るので、この点での労苦はかなり軽減されている。また本学は他大学からの図書到着が非常に早いのも嬉しいことである。

図書がすぐ利用出来るというのは、研究にとって重要な要素である。この点所属先の大学図書館等が十分な蔵書を備えていることが理想であるが、そこに無いときには他大学の図書へのアクセスが迅速であることが求められる。この点は以前に比べ格段の改善がなされているといえる（もとより本来的には、各図書館自身が図書の充実に努力すべきものである）。

実はこのことは、教員以上に学生にとって重要なことであろう。教員は、自分の研究にとって不可欠な図書であればいつ迄も待つ。しかし多くの学生は、図書館に行って目指す図書が無ければあきらめてしまう。本学の場合、別の校地にある場合でもあきらめる者がいる。本を直に手に取ることが出来るのは、広く学生に本を読んでもらう為の必要不可欠の前提である。名大附属図書館や本学の名古屋図書館は全面開架方式を取っているが、これは学生にとっては好都合なことと思う。これに加えて、教員からみるとやや物足りないこともあるが、本学図書館の場合には比較的ソフトな専門書も収集し、また通例大学図書館の軽視しがちな文庫・新書も所蔵しているのも学生には良いことだろう。

しかし残念ながら、本学の場合学生の図書館の利用はさほど多くない。それは一人当たりの貸出冊数にも表われているが、閲覧室に行っても試験期間を除けば学生の数はまばらである。牛に無理矢理水を飲ますことが出来ないのと同様、本を読むことは本人の自発性に掛かっているため、これへの対応には難しいものがある。最近は逆に、レポートなどを課すとインターネット上の情報（のみ）をコピーして提出してくるので、多くの教員はその対策に苦慮している。情報入手コストの軽減は必ずしも良いことばかりではないようである。

## 図書館ガイダンスを受けて 入門ゼミ（松尾）

現代中国学部 小林 さゆり



今回、初めて図書館利用についての説明を受けました。大学内の図書館をまだ利用したことのない私達に、担当のスタッフの方々はとても親切に、分かり

やすく説明してくださいました。その説明により、愛知大学のどのキャンパスからでも、すべての本が自由に貸出でき、また愛知大学にない資料でも、他大学や国立国会図書館から取り寄せ可能であることなど、今まで以上に利用価値のある図書館であることをとても魅力的に感じ、本当に嬉しく思いました。

また、館内の施設の案内では、誰でも利用できる学習室、いつでも自由に使える多数のコンピュータ、莫大な種類と数の本など……。見学により、とにかく規模の大きさに圧倒されました。

最後は、コンピュータを使用し、自分の利用したい図書を検索し、実際に自分の手で見つけ出すという作業を行いました。まだ操作に慣れない私達でしたが、スタッフの方々の手を借りながらも検索し、何とか自分の手で探したい本を見つけることができました。

このガイダンスにより、今まで知らなかった愛知大学の良さを知ることができました。これから先、レポートの作成・読書・勉強にと様々なことで図書館を利用することになると思います。その時には、大いに活用していきたいと思っています。

最後にスタッフの皆さん、貴重な時間を使いガイダンスを開いてくださってありがとうございました。今回のガイダンスが今後に役立っていくことを期待し、更にかんばっていききたいと思います。



## 私と図書館

文学部 大橋 雅世



私にとって図書館はなくてはならない場所です。

小さい頃から本を読むことが好きだった私は、小学校から高校に至るまで、絵本や小説を好きなだけ読むことができる図書館が大好き

で、放課後は毎日のように通っていました。

そんな私が愛知大学に入学し、四年が経ちましたが、今では図書館を「趣味の場」として利用すると共に「学ぶ場」としても利用しています。

日本文学のゼミに入り、源氏物語の表現の研究をテーマに学んでいる私にとって、底本や専門的な資料は研究を進める上で欠かせないものです。その点でリザーブ図書のコーナーはとても有効なシステムだと思います。貸出しはせず、各教授が指定した専門書を参考室に配架し、自由に閲覧することができます。手軽に専門書を利用できることで研究対象を身近に感じ、学ぼうという意欲が増していくのを身をもって感じています。

また、図書館内にメディアコーナーがあるので、図書館の資料から得られた情報を即座にパソコンに打ち込むことができたり、雑誌記事や新聞記事などをオンラインでできる環境が整えられているので効率的に情報収集ができ、とても便利です。

それに、公共図書館や他大学の図書館と比べ通常の開館時間が長いことはとても有難いことだと思います。しかし、夏休みなどの長期休暇中の半分以上が休館というのは少し残念に思います。自主学習に長い時間を費やすことが可能な期間に図書館の資料や設備を利用することができれば、学習の能率も上がり、意欲的な研究活動ができるように思います。

私は文学の他に、二年間勉強した甲斐あって卒業時に図書館司書の資格を取得見込みです。それは、私の本が大好きで図書館が大好きだったから成し得たことだと思っています。私にとって図書館はなくてはならない場所です。今までもこれからも。





**[Proquest Academic Research Library]**

ProQuest ARLは人文・社会学系のデータベースでは数多くの大学図書館での導入実績があります。2,000誌以上のタイトルを全文で収録しており、抄録の品質が高く定評があります。

**From Book Classification to Knowledge Organization: Improving Internet Resource Description and Discovery**

by Diane Vézine-Goetz

Classification systems and libraries have long recognized the potential of library classification systems to improve resource description and discovery. Yet it has taken the growth of an Internet content to provide the motivation and opportunity for more fully exploring the information organizing capabilities of these systems. One such system that uses a library classification system to facilitate access to Internet resources is OCLC's Serials database. Not only is an Internet index intended for use by library users, Professional editors view it as a valuable research resource. It provides:

- automatic abstracts, Dances
- Networking and linking capabilities, an
- Serials database. Using the hierarchy
- of "DTC" and "revised Dances" user
- First-level a capability allows user
- subject changes (such as "health")
- etc.) apply to such as "health"
- subjects grouped by "1"
- With just three "1"
- records number-
- manage-
- built-

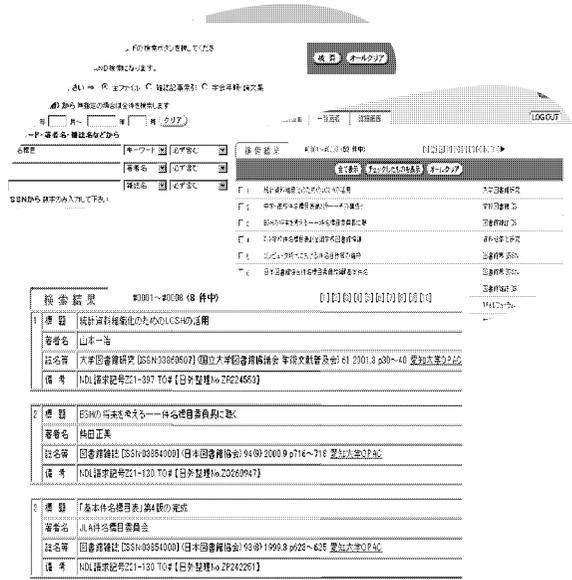
検索画面はシンプルでキーワードやディスクリプタ（主題をあらわす検索語）により様々な項目で検索が可能となっています。PDFで全文表示すれば電子ジャーナルとして充分活用できます。洋雑誌系データベースは電子化が国内雑誌よりもかなり進んでおり、速報性・検索機能・2次リンクの発展性等で優れています。冊子体からの媒体変換も進んでいますが、更なる利用の促進と契約データベースの追加には利用者みなさんの積極的利用が求められています。お気づきの点やご要望等を図書館までお寄せ下さい。

**[MagazinePlus 雑誌記事索引]**

Magazine Plusはこれまでの雑誌記事索引に加えて、大衆系一般週刊誌記事や国内の学術雑誌が刊行した人文社会学系の年次研究報告や学術論文集8,000冊、45万件的論文タイトル情報を加えた、総計670万件にのぼる国内最大の雑誌・論文情報データベースです。

図書館の入門ゼミ等でも紹介されていますし、学生のみなさんにもなじみの深いツールといえます。国内の雑誌記事の検索といえばまずこのツールを使って探してみましょう。検索は記事の主題を示すキーワードからでもできますし、愛知大学OPACとのハイパーリンクもされていますので効率的に雑誌記事の利用が行えます。

なお、愛知大学に所蔵していない雑誌記事を入手したい場合はレファレンスカウンターで取寄せ等の相談をお願いいたします。



わからないことはレファレンスカウンターで気軽にご相談下さいね！力になります。

利用上のトラブルとアクセス権  
インターネット上のリソースであるため利用に際しトラブルが生じやすいメディアでもあります。トラブル発生時には速やかに図書館の係員にご連絡ください。またすべてのデータベースが24h利用可能というわけではありません。またデータベース個別の質問はレファレンスカウンターで受付いたします。なお、基本的には愛知大学図書館内の端末からのアクセスを前提としておりますのでご理解願います。



# 愛知大学図書館開館予定表

変更する場合があります。掲示をご覧ください。

- 通常開館
- 開館時間短縮
- 休館

7 月				8 月				9 月			
日曜	豊橋	名古屋	車道	日曜	豊橋	名古屋	車道	日曜	豊橋	名古屋	車道
1 (火)	9:20~21:30	9:20~20:00	13:00~21:30	1 (金)	9:20~19:00	9:00~19:00	13:00~20:00	1 (月)	9:20~19:00	9:00~19:00	13:00~20:00
2 (水)				2 (土)				2 (火)			
3 (木)				3 (日)				3 (水)			
4 (金)				4 (月)	9:20~19:00	9:20~19:00	13:00~20:00	4 (木)			
5 (土)				5 (火)				5 (金)			
6 (日)	9:20~16:30	10:00~17:00	10:40~18:00	6 (水)				6 (土)			
7 (月)	9:20~21:30	9:20~20:00	13:00~21:30	7 (木)				7 (日)			
8 (火)				8 (金)				8 (月)	9:20~21:30	9:20~20:00	13:00~21:30
9 (水)				9 (土)				9 (火)			
10 (木)				10 (日)				10 (水)			
11 (金)				11 (月)	9:20~19:00	9:20~19:00	13:00~20:00	11 (木)			
12 (土)				12 (火)				12 (金)			
13 (日)	9:20~16:30	10:00~17:00	10:40~18:00	13 (水)				13 (土)			
14 (月)	9:20~21:30	9:20~20:00	13:00~21:30	14 (木)				14 (日)			
15 (火)				15 (金)				15 (月)	祝日(敬老の日)		
16 (水)				16 (土)				16 (火)	9:20~21:30	9:20~20:00	13:00~21:30
17 (木)				17 (日)				17 (水)			
18 (金)				18 (月)				18 (木)			
19 (土)				19 (火)				19 (金)			
20 (日)				20 (水)	9:20~19:00	9:20~19:00	13:00~20:00	20 (土)			
21 (月)	祝日(海の日)			21 (木)				21 (日)			
22 (火)	9:20~21:30	9:20~20:00	13:00~21:30	22 (金)				22 (月)	9:20~21:30	9:20~20:00	13:00~21:30
23 (水)				23 (土)				23 (火)	祝日(秋分の日)		
24 (木)				24 (日)				24 (水)	9:20~21:30	9:20~20:00	13:00~21:30
25 (金)		9:20~19:00		25 (月)				25 (木)			
26 (土)				26 (火)				26 (金)			
27 (日)				27 (水)				27 (土)			
28 (月)	9:20~21:30	9:20~19:00	13:00~21:30	28 (木)	9:20~19:00	9:20~19:00	13:00~20:00	28 (日)			
29 (火)				29 (金)				29 (月)	9:20~21:30	9:20~20:00	13:00~21:30
30 (水)				30 (土)				30 (火)			
31 (木)				31 (日)							

## 《編集後記》

- 「韋編三たび絶つ」(孔子が易を好んで読み、ために書物のとじ紐が三度も切れた故事から読書に熱心なこと—広辞苑)と申しますが、この号がさらなる図書館の利用につながれば幸いです。(M.K.)
- パソコンはとても役にたつけれど、本に直接触れて頁をめくるのが読書の原点。学生時代は自由な時がたっぷりあります。書庫など図書館の中をあちこち観てみると新しい発見がぎゅっとありますよ。(T.S.)
- カットは総務課の山口恵里子さんにお願しました。



編集・発行

愛知大学図書館

2003年6月20日発行 No. 27

- 豊橋図書館 〒441-8522 豊橋市町畑町字町畑 1-1 ☎(0532) 47-4181
- 名古屋図書館 〒470-0296 西加茂郡三好町黒笹 370 ☎(0561) 36-1115
- 名古屋車道分館 〒461-8641 名古屋市中区筒井二丁目 10-31 ☎(052) 937-8116